

---

# この世で一番不幸なクリスマスイヴの過ごし方

hurosuto

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

この世で一番不幸なクリスマススイヴの過ごし方

### 【Nコード】

N6420I

### 【作者名】

h u r o s u t o

### 【あらすじ】

今日はクリスマススイヴ。俺は家族もいない家で一人で過ごしていた。そこにおもわぬ人物が現れ！？（この小説はあなたの抱くクリスマススイヴの夢を高確率で破壊します。ご注意ください）

俺の名前は加藤誠二郎、十六歳。

そして、今日は十二月二十四日つまりクリスマスイヴ。

この日はでは家族や友人、恋人と過ごすのが当たり前なのだが、あ  
いにく俺には恋人はいない。

友人に連絡したら「男とクリスマス一緒に過ごすとかねえよww」  
とか「恋人いないとかウケる（笑）」などの返信が返ってきた。

さらに不幸なことに両親は二人だけでハワイへ、一つ離れた妹は彼  
氏とデート、飼い猫でさえどこぞの猫とニャンニャン。

家には俺一人。

・・・いや、おかしいだろ！！この状況、今日は聖なる夜なんだぜ  
！？アイツらなんでそこまで俺を罵る。モテない男がそんなに悪い  
のか！？そしてせめて猫は家にいろよ。なんでニャンニャンしてん  
だよ、わけわかんねーよ！

はあ、誰でもいいから俺の寂しさを紛らわしてくれ。

現在十時。

状況は変わらずにこんな時間になってしまった。

もう泣きたくなくなってきた。泣いていいですか？枕を濡らしていいで  
すか？

グスツ、みてるよあいつら、冬休み明けたら上履きに画鋏仕込んで  
やる。楽しみにして待ってるよ・・・。

うはははっはは、ドーン、おわっ！！？

布団の中で計画を練っていたら、いきなりドーン、とでかい音と同  
時に家が揺れる。

な、なんだ！？クリスマスステロか！？、それとも、一同志たち（モテない男たち）のテロか！？

全く何が起こったのか分からず布団から跳び起きる。

すると、俺の部屋の机が大破して、そして壁に木製のソリが壁に突き刺さっていた。

ソリには大きな白い袋と、人がいた。

な、なんだこれ？

ま、まさか、サンタなのか　！？

俺はサンタに近付いたが、それはよく聞く白い髭をしたお爺さんではなかった。そこには赤いサンタ服を着ていて、下はなんと赤いミニスカートをはいていた。

そして顔を見てみるとそれはなんととも言えないほどの美人だった。

女神来たー！ー！ー！ー！

やっべ、テンション上がる。まじヤツベ。

おっと、喜んでいる場合ではない。この人は今気を失っているようだ。

さて、俺のすべきことは

- 1、声をかける。
- 2、救急車を呼ぶ。
- 3、大人の階段上る。

俺は漢だ。だから選ぶべき選択肢は無論、「3番の大人の階段を上る」だ！

いつまでもシンデレラじゃないぜ！

俺はクリスマスケーキを販売していそうな服装の女性サンタに顔を近付ける。

その距離十？、五？、三、二、一、ゼー。

そこで女性は目をぱっと目を開けた。

やべえ、どうしよう。あと何mmかっでところで起きてしまった。0、3秒ほどあれば、俺は大人になれたのに……。くっそ、神様はいつも気まぐれだから困る。

まあ、その後悔より、今はこの状況をどうするかなんだが……。とりあえず。

「あ、だ、だいひょうふでしか!？」

……。噛んでしまった。

こういう場合にありがちなことは、言葉を噛んでしまったら、その噛んだ奴はテンパっているか、やましいことを考えているかのどちらかだ。そして俺の場合前者であって後者ではない!

だが、俺はそう思っているのは俺だけなのかもしれない。

……。言い直そう。コホン、えーと。

「大丈夫ですか?お姉さん」

今度は丁寧でダンディな声で言った。

しかし、目の前の女性は辺りをキョロキョロと見回す。

えーっと、なんか悲しいな。言い直した意味がないなんて……。

「あ、あの」

いきなり声をかけられた。

「な、なんですか?」

「ここは何処でしょうか?」

そっちから突っ込んで来たくせに、そんなことを言いますか？

「加藤家の2階の部屋です」

どう言えば正しいのか分からず、そう答えた。

「あの、そういう意味じゃなくて、ここに住所なんですが・・・」

そういう意味か！恥ずかしい思いをしてしまった・・・。

「あつ、すみません。ここは青空丘五丁目ですけど」

「え！？どうしよう大変もどつてきてしちゃった！」

今さらだが気付いたことがある。それは突き破られた壁と大破した俺の学習机・・・。

俺はどうすりゃあいいんですか？親が帰ってきたら殺されちゃうよ・・・。

「あのー、机と壁、どうにかしてもらえませんか？」

「え？、あーっ、す、すみません！！今直します。あ、でもどうしよう。まだ仕事が残ってるし・・・」

困った表情を見せる。

やべえ、本気で可愛すぎる。はっ、落ち着け誠二郎。ここで理性を失ったら、俺の人生お先真っ暗だ。まずはこの状況をどうにかしよう。

「なんなら、手伝いましょうか？」

「えっ、でも、私のせいでこんなことになってしまったので手伝わせてしまうのはさすがに失礼では・・・」

「大丈夫ですよ。俺は今から寝るだけだったんで、プレゼントの一つや二つ運びますよ」

「では、すみません。お願いします。えーっと」

「加藤誠二郎です」

「誠二郎さんですか。分かりました。私はイヴって言います」

「イヴさん、ですね」

「いい名前だ〜。」

「では、誠二郎さんその袋を開けてみて下さい」

「はいはい、・・・ってうおい!?!?」

中を見たらびっくり。包装紙に包まれたプレゼントが一つ二つではない、数個だけでもない、何十個もある。

「あ〜、これ、何個ほどあるんですか？」

「えっと、少なくとも100個ぐらいはあると思いますよ?」

軽くそんな数を言われた。

しかし、ここで投げ出したら男じゃないよな・・・。

「分かりました。で、これどうやって運びましょうか?ソリはあんな感じですし」

ポロポロでスタスタだった。見るも無残ってかんじ?

「あ、じゃあこれを」

そう言つて、イヴさんは俺に小さな笛を渡した。

「えっと、これは何ですか・・・？」

こんなもの渡されても困るんですけど・・・。

「いいから吹いてみてください」

さあ、どうぞどうぞと俺に催促する。

「じゃあ・・・」

吹いてみた。音色は普通だった、ピィ〜〜〜って感じ。

「あ、来たみたいですよ」

イヴさんは窓の外のほうに指差す。

俺も窓に近づき外を見してみる。すると夜空に何かが家に近づいてくる　！！？

それはとてつもなく速く突っ込んでくる。

「わああああああああああああああああああ！！！！？」

俺はたまらず叫喚叫喚してしまふ。

激突する　！！

目を開けてみる。

普通笛で呼ばれるとしたら、この場合トナカイだろう。

トナカイ以外考えられないだろう。

しかし、あなただったらどうする？

目の前に筋肉質で、頭にサンタ帽子と黒い海パンだけを身につけ、黒いサングラスをかけた小麦色にやけた肌の男が腕組みをして真っ白な歯をこれでもかと思せ付けながら笑っている男が宙に浮いている光景を目の当たりしたらあなたは どうするか？

ちなみにここまで詳しく詳細を言いながら質問をするのは、現に俺



の目の前にいるからだ。  
ちなみに俺の回答は

「変態だぁー……………」

ご近所のことを気にせず叫んじゃった。絶叫しちゃった。だが仕方ない。

誰でもこんな光景を目の当たりにしてしまったらこうなるのでは？

「Oh、イヴチャンジヤナイデスカ、ドウシマシタカア？」

目の前の変態は片言な日本語を使っていた。

「あ、メリー。実は今日は頼みがあつて来てもらったの」

「Aha、タノミゴトデスカ。モチノロンデスヨ。イヴチャンノ  
タノミナラナンデモOKデス」

「実はこの方、加藤誠二郎さんといって私の手伝いをしてもうこと  
になったんです。けど、大事なソリが壊れてしまつて困ってるん  
です」

「ナルホド、ソコデワタシノデバンツテコトナンデスネ」

イヴさんがこんな変態と知り合いなのがとても悲しい。  
そして、俺はほつとかれて話がどんどん進んでいく。

「あ、誠二郎さんこちらメリーさんといつて私のトナカイなんです」  
「いや、イヴさん。それはトナカイではありません。単なる変態で  
す……っていうか、あなたのなんですか!!!？」

「はいそうですよ」

「カワレチャツテマスウ」

黙れ変態。これが小さい子が見ていたらどう責任とるんだ？PTAに問題視されんぞ。

「で、イヴさんこの変態を呼んどいてどーすんですか？」

「違います。メリーは変態なんかじゃありません。メリーは私の大事なべ。」

「分かりました！トナカイなんですネ！？認めます！認めますからそれ以上は言わないで下さい！！！」

やばいってイヴさん。それ以上言っちゃったらマジでやばいって。

「で、このへん いや、メリーさんをどうして呼んだんですか？」

「それはですね、メリーがいたほうがプレゼントを配るのにいくらか楽だと思っんですよ」

たしかにプレゼントを配るのは楽になるかもしれないが、俺にとっではこんな奴の近くにいたら酷ですよ？

「・・・分かりました。じゃあメリーさん、よろしくお願いします」

「ハ〜イ、ヨロシクデスウ」

手を差し伸べてきた。これは握手をするときの差し出し方だ。

いやだ、変態と握手なんてやだよ！！絶対やだよ！！！！

「？、どうしたんですか誠二郎さん。メリーは誠二郎さんと握手をしたがってますよ？」

俺はこんな変態としたくないんですが……………。

「もしかして、メリーのこと嫌いになりましたか？」  
なみだ目でこっちを見るイヴさん。

やめてください、そんな目で俺のことを見ないで下さい！

俺はそんなイヴさんの目に耐えられずにメリーと握手をしてしまった。

加藤誠二郎、高校一年生の冬に人生初めて変態と握手をする。

彼の目からはなぜか大粒の涙が流れたという。

対するメリーは新たな親友を見つけた喜びで、真っ白な歯を見せてつけ満足そうな表情だったという。

「じゃあ、私はここで学習机と壁を直しておくので誠二郎さんはメリーと一緒に行ってきてもらいますか？」

「そういえばいまさらって感じですが、イヴさんこれ直せるんですか？」

頼んでおいてなおさらだが。この人話してみると天然みたいだし。

「アンシンシテクダサイ、セイジロウサン。イヴチャンハコウミエテコウイウモノノシュウリガ、トテモトクイナンデスヨ」

ああ、そうなんですか。でもなんであんなに喋るの？俺はイヴさんと話していたはずなんだが？

「じゃあ、任せます。ではへん、ゴホツゴホツ、失礼。・・・  
メリーさん行きましようか」

また間違えそうになったからワザと咳をして誤魔化した。

「ハイ、イキマシヨウ」

そう言つて変態は、俺の前で両手両足を床につけた。

・・・なにこれ？どういうこと？

「ドウシタンドスカ？ハヤクイキマシヨウカ？」

ええ、行きましよう。さつさと行きましよう。だけどあんたはそこで何をしてんのかと俺は問いたい。

「どうしたんですか？メリーが待ってますよ。早くメリーの背に乗つてください」

「はい！！！！！！！！？」

それは無理だ。それだけは無理だ。頼みますからイヴさん俺にそんな酷なことを言わないで。握手はしたがそんなことをしたら俺の大切な何かが確実に崩壊してしまう。だから、できませんって！！

「ハヤクシテクダサイ」

だから黙れ変態。この仕事が終わったら俺はお前を署に突き出すからな。日本で裁いてもらうからな。

「そ、その方法よりも別々にやったほうが早く終わりますよ、イヴさん」

俺は提案をした。何とか運命に逆らつてみせる。こんな運命は絶対嫌だ！

「あ、確かにそっちのほうがはやく終わりますね。ではそうしまし  
ようメリー」

「ワカリマシタ。スコシザンネ　「はい、行きましよう！ぱぱっ

とやって終わらせましょう、ね、メリーさん？」

お前に最後まで言わせる権利は俺が剥奪させてもらう。お前の存在は罪だ。

「さてと、じゃあ俺はこれぐらい持って行きますよ」

「・・・ナンカボクノハウガニモツオオクアリマセンカネ？セイジロウサン？」

「んー？気のせいですよメリーさん。では俺は行ってきますよ。あ、イヴさん渡す家の地図を貸してくれませんか？」

「いいですよ。はい、どうぞ」

俺はイヴさんから地図を借り部屋を出て行った。

「さて、まず最初の子はつと・・・」

地図を見る。そこは俺の家から二件離れた家の子供だった。

「ここだな。さてプレゼントを何処におこうか？インターホンを鳴らすのは駄目だしな・・・」

とりあえず俺は玄関の前にプレゼントを置いていった。

そうやってプレゼントを置いていったら気がつけば午前零時七分。

日が変わってしまった。

てかもうとつくに妹は帰ってきているだろう。

俺はあらかじめそのことを考えておいて、妹にあんなスリ変態を見せられないということで袋に入っていたプレゼントを十個ぐらい自分が運ぶ袋に入れておいたのだ。

つまり、あつちの変態のほうには少なからず90個はあるということだ。

そして、俺は残り一個になった。

「さて、ここが最後か」  
プレゼントを玄関に置いて俺はその場から去っていった。

俺は自宅に戻り、こつそりと鍵を使ってドアを開けて家に入る。  
そして、忍び足で家にあがりそくさと自分の部屋に入る。

「ただいま戻りましたよ。イヴさん、ってうお!!!?」

すごいことに俺の貫かれた壁は元通りになっており、机も新品同様  
みたいにピカピカと光っていた。

そして、自分のソリまでが直っていた。

「あ、どうもありがとうございました誠二郎さん」

イヴさんはそう俺にお礼を言った。

「いえいえ、困ったときはお互い様ですよ」

「ソウデスヨ、イヴチャン」

お前いつからいた変態!!!

「では手伝ってもらいありがとうございます。これは私からのお  
礼です」

そう言っつてイヴさんは俺に握りこぶしを差し出した。

俺はそれを受け取った。がしかし、それはさつき見た笛だった。メ  
リーを呼んだ笛だった。

俺は がくぜん 愕然とした。

なんで俺にこんな魔道具を・・・?

「実はメリーが誠二郎さんのことを気に入ってしまったようなんです

すよ」

え！！！？何それ？どういうことですか！！！！？？？

「いや、でも、メリーさんはイヴさんと仲が良いじゃないですか！  
？これ渡しちゃったらメリーさんと呼ぶことが出来ないですよ」

俺は言った。これまた自分の人生を、運命を変えるために。

「大丈夫です。メリーはたいていこっちにいるんで」

「ソウデス。ダカラキニセズウケトツチャツテクダサイ」

うわ〜、どうしよう。この展開マジでねえよ。

「では私たちはこれで。また来年会えたら会いましょう誠二郎さん」  
イヴさんは俺に手を差し出した。

俺はイヴさんの手を握り返事をした。

「はい、必ず会いましょう」

「デハサヨウナラデス、セイジロウサン」

「さようなら、イヴさん」

俺は目の前にいる変態の存在を無視して別れの挨拶をした。

ソリに乗って遠くのほうへ行くイヴさんを見送った後、俺はすぐに  
寝た。

今日はマジで疲れたな、主に精神的な意味で。

こうして俺のケリスマスイヴ聖なる夜は終わっていった

(後書き)

気が向いたらそのうち続編を書くかもしれませんが。  
まああったとしても先の話になると思いますがね……。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6420i/>

---

この世で一番不幸なクリスマスイヴの過ごし方

2010年10月21日21時34分発行